

インタープリテーションとしての「文学の力」 — 小説「屋久島物語」でお伝えしたいこと —

柳田一郎（筆名：柳瀬良行）

〒 890-0034 鹿児島市田上 5-16-34

■ 自己紹介

1954年 鹿児島県日置郡日吉町（当時）生まれ

1977年 熊本大学法文学部法学科卒業，鹿児島県庁入庁

※平成12年4月-15年3月（財）屋久島環境文化財団勤務

2014年 鹿児島県退職

所属団体：霧島錦江湾国立公園・鹿児島地区パークボランティア，NPO法人くすの木自然館・専務理事（非常勤），NPO法人桜島ミュージアム・理事，日本環境教育学会会員，日本自然保護協会会員，日本野鳥の会会員

■ 「屋久島物語」執筆のきっかけ

私は，平成12年（2000年）4月1日から15年3月31日までの3年間，鹿児島県庁から，上屋久町宮之浦の屋久島環境文化村センターに本部を置く，財団法人屋久島環境文化財団に総務企画課長として派遣されました。同財団は，平成5年3月に鹿児島県および上屋久町・屋久町からの出資により設立された，屋久島環境文化村構想を推進するための財団法人です。

屋久島環境文化村構想は，平成2年6月に作られた「鹿児島県総合基本計画」の中でも，特に重要と考えられた県の施策のひとつです。屋久島の豊かな自然とその自然の中で作り上げられた自然と人との関わり「環境文化」をもとに，「環境学習」を通じて自然と人間の共生を実現しようと考えられた屋久島の地域づくりのための施策です。既に4分の1世紀を過ぎた施策ですが，歴代の知事はもとより，現在の伊藤祐一郎知事のもとでも，大切な施策として充実が図られています。

小説を発刊した平成25年は，この財団設立20年目の年であり，屋久島が世界自然遺産に指定されてから同じく20年目という年でした。

この物語は，この2つの出来事を記念して創作した小説（フィクション）です。フィクションではありませんが，3年間を一緒に過ごして下さった財団職員の皆様，アテンダント（自然解説員）をはじめとしたセンター職員の皆様，宮之浦区青年団とおた踊り保存会の皆様，上屋久町・屋久町両役場の皆様，そして宮之浦区長ほかの住民の皆様との出会いをもとに創作したものです。

■ 「屋久島物語 第1部キビタキ 第2部月の神」

平成25年12月1日第1刷を発行，税別600円の文庫本（ISBN 図書コード978-4-7765-3764-9）となり，アマゾンなどのインターネット書店のほか全国50書店で販売されました。県内では，鹿児島県庁内書店，ブックスミスミ・オブシア店，屋久島環境文化村センター，文学サロン「月の舟」，くすのき自然館・重富干潟小さな博物館で，販売されています。

発行元の日本文学館のホームページでは，以下のように紹介されています。「ページをめくればそこから，雨を含んだしっとりとした空気と塗り込められたような濃い緑が迫ってくる。大自然と共存するからこそ輝く，生活を守らんがための大人の男の矜持，年月に負けない娘の愛の粘り強さ，豊かな自然がはぐくんだ歴史への共感を込めて描いた小説」<http://www.nihonbungakukan.co.jp/modules/myalbum/photo.php?lid=5846&wmode=1>。

■ インタープリテーションとしての「文学」

法学部出身の私は、自然環境についてわかりやすくお伝えする技術や工夫「インタープリテ



ション」を研究しています。このため、これまで本誌はもとより、日本環境教育学会や日本環境法政策学会などで関連の発表を行ってきました。そして現在、多くの人々に同時に同じ内容をお伝えする工夫のひとつとして、「文学の力」を活用したいと思うようになりました。なぜなら、過去、いくつもの自然観察行事の現場で、記録の手段としての写真・動画や写生のほかに、俳句、川柳、和歌などの文芸活動を見たり聞いたりしてきたからです。

また、文学には既に「ネイチャー・ライティング」という分野があり、「沈黙の春」や「複合汚染」のように、圧倒的広範囲の人々に長期間に渡るメッセージを届け続けることもできます。このことは、平成21年、市民グループ「指宿ムービー

プロジェクト」による自主映画「砂の道の向こう」の同名原作小説を発表した時、確信しました（「2010自然愛護36号」にも発表済み）。この映画は、指宿市内や鹿児島市などでの上映会、地域でのミニ上映会、ユーチューブなど動画サイトへのアップにより、3千人を超える人々に見ていただきました。また、新聞各紙や日本野鳥の会や日本自然保護協会などでは、機関紙の記事にも取り上げていただきました。結果として、映画鑑賞者や小説の購読者は、国外にまでいらっしゃいました。

この映画の原作を第1部として書き直し、第2部、第3部を書き増した小説集が、一昨年9月に同じく日本文学館から発行した文庫本「知林ヶ島物語～砂の道の向こう」です。霧島錦江湾国立公園の自然とその地に隠れた歴史であった指宿海軍航空隊の水上飛行機による特別攻撃隊の物語です。

その後、この物語は、今年度の指宿市の案内板や指宿市立考古博物館による同市内の戦跡再発見と映像や音声による記録事業にまでつながりました。まさに「文学の力」です。

（参考）「知林ヶ島物語」日本文学館のHP
<http://www.nihonbungakukan.co.jp/modules/myalbum/photo.php?lid=5347>

映画：指宿ムービープロジェクト HP <http://www.synapse.ne.jp/drums/>.

■ お伝えしたいこと

(1) 屋久島に代表される自然の保護 — 野鳥をはじめとする動物や植物の生態、山への畏敬を「緑の蒔き」として伝える。

(2) 山だけではない島の魅力の紹介 — 門まわり、檀那墓、先島丸など、里の歴史と文化を伝える。

(3) 鹿児島県施策「屋久島環境文化村構想」の紹介 — 島を作り上げる力となる鹿児島県の施策、公務員の生活、財団の有り様を伝える。

(4) 島の暮らしと単身赴任 — 島の厳しい現実とそれを克服する人々の力、離島救急、消防団、青年団の存在、転勤族や単身赴任者の土地とのか

かわりを伝える。

(5) 屋久島研究の落とし穴 — 自然と人の生活との乖離を見ないまま理想を貫く人々のおかしやうい間違いを伝える。

(6) 男の矜持 — 家族を愛するがゆえの忍耐、本当の大人の男の世界を伝える。

(7) 自殺防止 — 誰にも生まれた意味があり、生きるべき理由がある。その理由を振り返ることを伝える。

■ あらすじとキーワード

第1部 キビタキ「こんな時こそ、遣らずの雨降ればいいのに」

屋久島の森が育てた慎ましくも清冽な恋の物語、娘は幼い頃から慕い続けた人に出会い恋に落ちた。男には愛する家族と大人の男の矜持があった。娘の一途な思いは、新しい物語を生み、やがて伝説となる。

キーワード：屋久島環境文化村構想、離島救急、白谷雲水峡、バードウォッチング、門まわり、初鏡、青年団、ウミガメ、虫、消防団、檀那墓、唐船淵、水軍、軍船、雪祭り、月待ち、月の神、涙、林道、リュウキュウサンショウクイ、キビタキ。

第2部 月の神「奥様のある人を好きになるとは、こういうことかもしれないと思った」

屋久島に通い続ける女性研究者、彼女の辛い過去と苦しい恋の物語、過去を忘れるため、彼女は学問の道に入り屋久島を研究する。そして男と出会い、恋に落ちる。

キーワード：太鼓岩、母、椋鳩十、日本野鳥の会、バードウォッチング、修士論文、日本環境教育学会、鹿児島県総合基本計画、環境学習、漁師塾、流星、月の光、けもの道、縁（えにし）、山岳救助隊、木漏れ日。

■ 参考 連載小説「さきしままる」

第7回銀華文学賞・奨励賞受賞作品「さきしままる」を新聞連載用に書き直し、昨年4月から5月にかけて、鹿児島建設新聞に15回連載しました。

屋久島の人が亡くなった時、死者の世界へ行くために乗る船「先島丸」伝説をもとに、屋久島の森の生き物たちや魑魅魍魎の世界を、山岳遭難防止の気持ちも込めて書いた物語です。同新聞社のホームページでお楽しみいただけます。

鹿児島建設新聞 HP <http://www.kc-news.co.jp/rensai/sakishima-index.html>.

Nature of Kagoshima 40: 281-283